

(別紙1)

論文の内容の要旨

論文題目 文脈の中のアフォーリズム—ヘブライ語聖書箴言10章1節-22章16節の研究—
氏名 加藤久美子

ヘブライ語聖書箴言10章1節-22章16節（以下、箴言第Ⅱ部と略記）には、人生の真理もしくは真理とされるものを述べる、原則として文法的に完結した375の文が並列されている。それぞれの文は簡潔な2つの句から構成され、それらが聖書のヘブライ詩の並行法によって結ばれて1つの詩行をなしている。以下ではこの文を^{ことば}詞と呼ぶ。歴史的批判的聖書学の初期から1980年代まで、箴言第Ⅱ部は収集者が既存の個別の詞を集めて無作為に並べた収集体（collection）であり、詞の配列そのものは特別な意味を持たないことが研究者の一般的な合意であった。これに対して1990年代から、箴言第Ⅱ部における詞の配列には意図を認めうること、この部分全体が一定の構造を持つ構成体（composition）と見なしうること、さらには詞の配列および全体の構造がこの部分の解釈に意味を持つことを示す研究が増し、以来、今日までこれらの仮説について議論が続いてきた。この2つの仮説に関する研究者の合意は今なお形成されていないが、特定の主題について箴言第Ⅱ部を論じる場合にもこれらの仮説の評価は不可欠になっている。

本論文は、箴言第Ⅱ部の顕著な内容的特徴として注目されてきた、צדיק「義人」とרשע「邪悪な者」を対照する詞の思想史的社会的意味を考察するための基礎として、この部分の

詞の配列は無作為であるとする収集体仮説を前提とする研究の成果と問題点を総括した上で、配列は意図的であるとする構成体仮説において示された箴言第II部の構造を検討し、構成体の構造に関する作業仮説を立て、テキストの文脈におけるצדיק「義人」とרשע「邪悪な者」を対照する詞の意味の考察の方法を提示するものである。

第1章では、箴言全体の構造をマソラ本文の表題と文学的形態の観点から論じ、箴言第II部の文献としての一体性と相対的独立性を示した。第2章では、収集体仮説に拠る研究の代表的な事例の成果と問題点を論じた。この種の研究には、収集体にある種の一体性を認めるものと、これを認めず、そこに異なる思想史的段階に由来する編集層や異なる社会的環境に由来する伝承が含まれていると想定して、それらを分けるものがあるが、前者の例としてフォン・ラートとスクラドニの研究を、後者の例としてマッケインとヴェスターマンの研究を取り上げた。後者の研究では思想の変遷の図式が立てられ分析が行われているが、マッケインによる世俗的国際的知恵から宗教的知恵への変遷、またヴェスターマンによる外国の文学の影響を受けていない捕囚前の庶民の俚諺から外国の影響を受けた捕囚後の教師による抽象的教理へという変遷の図式は、箴言にみられる古代エジプトの教訓文学の広範な影響を無視しており適切ではない。一方、収集体仮説に立つ研究において内容の観点からなされた詞の類別は、箴言第II部の研究の基礎をなすものである。

第3章では、箴言の研究、特にצדיקとרשעの運命を対照する詞の研究において使用される学術用語「行為帰趨連関」に関連する問題を取り上げた。これは、クラウス・コッホが人の善悪の行為とその結果の結合に関する古代イスラエル人の考え方を表す用語として導入したものである。コッホの説は、西欧近代の法学的概念に準じたヤーウェの応報の概念とは異なる善悪の行為と結果の結合の過程の言述がヘブライ語聖書にあることを示した点で意義があったが、多様な表現形式と内容をもつ言述を一括りに非合理的な思考法の現れとして捉えた点に問題がある。この用語の下にまとめられた箴言の詞には、実のところ表現形式と話題の点でいくつかの種類が含まれており、それぞれには異なる修辭的機能が認められる。コッホの説は、フォン・ラート、ゲーゼ、シュミートによって拡大されたが、特にシュミートの説に対してはエジプト学者アスマンによる批判と修正がなされている。

第4章、第5章では、箴言第II部の構成体の構造の分析のための予備的考察を行った。第4章ではラウスによる古典的並行法の3類型の理論および1980年代以降の新しい並行法の定義と記述を取り上げた。箴言第II部の詞の分類法として用いられてきたラウスの3類型

は、用語の対応を過度に重視する見方をもたらし、また「対立」、「同義」のカテゴリーに分類される句の間にも意味的進展があることの認識を妨げるという欠点をもっていた。これに対して、並行法の特質は後句における意味の強化と進展にあるというクーゲルとオルターの指摘、また文法、意味、音声という3つの面における言語学的等価の活性化というバーリンによる並行法の言語学的定義、および1詩行内だけではなく、隣接する詩行間、また離れた詩行間にも並行法があるという概念の拡大は、箴言第II部の個別の詞の理解および構成体の構造の分析を刷新するものである。

第5章では、箴言全体にみられ、また第II部に比較的多い、変化を伴う反復の詞 (variant repetitions) に関するこれまでの研究を総括した。近年の研究ではこの事象について、既存の詞の利用による新しい詞の制作の手法、および構成体に構造をもうけるための編集者もしくは著者による利用という2つの観点が提示されている。これらは互いに排除するものではなく、箴言の研究では両者を念頭に置いて分析を行うべきである。その際、構成体に構造をもうける手法としては、変化を伴う反復の詞は、反復される部分が多いために遠隔の位置でも知覚可能性が高いという特徴があるとはいえ、詩行間の並行法の一形態にすぎず、その他の並行法と機能の点では本質的な違いを持たない点に留意が必要である。

第6章では、箴言第II部の構成体の構造について、小規模なテキストの構造 (すなわち小規模ユニット、中規模ユニット) と大規模なテキストの構造 (すなわち全体および前半部と後半部) について、先行研究の検討と作業仮説の構築を行った。小規模なテキストの構造に関しては、先行研究に示された小規模ユニット形成の手法を整理して、それが文法、意味、音声という3つの面における言語学的対応であることを示し、さらに、箴言第II部の前半部における正負の価値を対照する詞に特有のユニット形成の手法として、価値の順序のパターンと対照される性格もしくは行為者の語形の対応があることを示した。複数の小規模ユニットからなる中規模ユニットに関しては、現状ではすべての区切れに関する合意を得るのは困難であるが、箴言10-13章については、中規模ユニットと章区分が一致しているという仮説には一定の説得力があり、これを作業仮説とすることが可能である。

大規模なテキストの構造については、まず第II部全体について、これが前半部と後半部に分かれていること、それらには形態の点で異なる特徴があるが、内容の点で連続性があることを示し、これらがかつて独立の文書として存在したという説が適切ではないことを明らかにした。次に צדיק ורשע に関する詞に関して以下の3点を示した。すなわち、רשע וצדיק

に関する詞は前半部の中でも特に10-12章に集中していること、また、第 II 部前半部の始めと終わりにはקדיקとרשעを対照し、それぞれに対する神の行動を述べる詞(箴10:2-3; 15:28-29)によって対応が設けられていること、さらには10-12章と第 II 部終わり近くの21章に、קדיק、רשעもしくはצדקה「義」に関する詞および変化を伴う反復の詞などによって対応が設けられていることである。これらのことから、10-12章の主要な主題であるקדיקとרשעの対照は、第 II 部の前半部および全体に一体性をもたらす主題でもあり、קדיקとרשעに関する詞の集中という特徴を持つ10-12章は第 II 部全体の構造と緊密に結びついていることが明らかになった。

第7章では、קדיקとרשעに関する詞が集中する箴言10-12章について、第6章で示した作業仮説に基づき構造の分析を行った。その際、音声の面での対応の分析を省略したが、文法と意味の面での対応関係を調査することによって小規模ユニットの形成に関する仮説を支持する多くの証拠が得られた。本論文における分析の独自性は、従来十分に考慮されてこなかった文法すなわち構文と語形に関わる対応をすべての箇所について調査して分析に用いた点、価値の順序のパターン、および対照された性格または行為者の語形の対応を分析に用いた点、また、言語学的対応によって多数の詞が鎖のようにつながれている箇所においてバーリンの並行法の知覚可能性の原則を参照して詞の間のつながりの強度を比較する方法を用いた点である。その分析を通して、箴言10-12章では、詞のペアや3つ組という最小単位が単体で小規模ユニットを形成していることはまれであり、多くの小規模ユニットは、ペア、3つ組、個別の詞などの要素がつながれた比較的大きいまとまりをもつこと、また、箴言10-12章におけるקדיקとרשעを対照する詞の多くは、小規模ユニット内の下位ユニットおよび小規模ユニットの文脈に緊密に結びついており、二次的な加筆層であるとは考え難いことが明らかになった。小規模ユニットおよびその下位ユニットには、具体化、理由と帰結、時間的進展、強化などの意味的関連性がみられ、また、一方の詞(もしくはペア)が他方の詞(もしくはペア)の真理を限定するユニット、単純ではない正負の価値や多様なアフォーリズムの形態を示すユニットが見出された。第8章において結論と展望を示し、最後に、諺、アフォーリズム、格言、箴言の概念に関する補論、第 II 部における正負の性格などを表す用語に関する付録を付した。